

● 赤池弘次先生の京都賞受賞

土谷

隆（数理・推論研究系）

本ニュースでも既報の通り、赤池弘次元所長が第22回京都賞を受賞された。去る11月京都で行われた授賞式等に引き続き、12月4日には如水会館で研究所主催の受賞記念ワークショップと受賞記念パーティが開催された。私のような年代の者にとっては、受賞記念パーティは「伝説の共同研究者」の先生方を間近で拝見し、お話を聞かせていただく貴重な機会となった。

各先生の心のこもったご祝辞を襟を正す気持ちで拝聴した。それぞれのお話に深い感銘を受けたが、ここではその中から一つだけ、兼重一郎博士からうかがったエピソードを紹介させていただきたい。兼重博士はいすゞ自動車に勤められ、赤池先生と自動車の振動特性の解析の共同研究をされた方である。

兼重博士が赤池先生と共同研究を始められたのは、一高時代の親しい友人でいらしたというご縁だが、一高当時、仲間内で断トツに優秀といわれていた二人がいたという。その一人が赤池先生、そして、もう一人は、志村五郎先生であったということである。志村先生は、谷山・志村予想を通じ、ワイルス博士のフェルマー予想の解決に大きく貢献したことで知られている、世界的に有名な数学者である。

赤池先生のご研究についてよく言われるのは「先生が実際の問題を大切にされたことが、AICをはじめとする偉大な成果に繋がっていったのだ」ということである。これはまぎれもない事実だとは思いますが、それは事の半面であり、素地があってこそ初めて可能であったのだということを、兼重先生のお話を聞いて改めて認識した。また、敗戦

直後の「AICとフェルマー予想の意外なニアミス」に少々ロマンチックなものを感じ、ここに記させていただいた次第である。

京都賞は今回で22回を数えるが、第1回は、情報理論の創始者であるシャノン博士と現代制御理論の創始者であるカルマン博士に与えられている。赤池先生のお仕事は、統計学の創始者ともいえるフィッシャー博士も含め、数理科学、情報科学の基礎を築かれた、これら3人の偉大な先駆者の業績を正統に受け継ぎ発展させたものとして、本当に素晴らしいものだと思う。

赤池先生は絶えず「データからの有効な情報抽出」を追求され、それを足がかりとして、多くの分野にまたがる偉大な業績を残された。現在、大量のデータから有用な情報を引き出すことは、非常に多くの学問分野における共通の関心事である。また、それは、知的情報処理の最先端の諸手法が競い合う、厳しい、しかしとても面白い世界でもある。そしてそのまっただ中にあるのが統計数理研究所である。何でもありのその戦いの中で「統計数理研究所は『統計学』の研究所である」などと立場を限定していき生き長らえていられるほど世の中生やさしいものではないであろう。「データからの有効な情報抽出」を柱とし、多くの分野と積極的に交流しながら、「温故知新」、学問の伝統と蓄積の上に立って、更に新しい分野と方法論を切り開き、「世界の中で統計数理研究所でできない価値のある研究」をすることが、研究所の理想の姿であると考えている。それが赤池先生が身を持って示されたことであり、この理想に向けて、精一杯努力していきたいと思う。